



## こどもの救急・おとなの都合

札幌市医師会  
北海道がんセンター  
副 院 長 内藤 春彦

若い頃、道東の町立病院で当直をしていた時、幼児の急患が来ました。発熱し、耳が痛いと言います。耳のまわりは腫れ、耳鏡でのぞくとまさに教科書でみたとおりの中耳炎の像で、鼓膜はパンパンに腫れていまにも自壊しそうです。ちょっと躊躇しましたが、血管にもっとも乏しそうな部分をねらって生まれてはじめて自己流で鼓膜切開をしました。いっきに濃い膿が流れ出ました。冷湿布を指示し、抗生剤を処方して診療をおわりました。

ここまで中耳炎がひどくなるにはかなり時間がかかっているはずですが。なぜ日中に来なかったのかと親をなじったものです。母親はちいさくなって申し訳なさそうにこたえました。「牛飼いなもので昼間は子供を見てやるのができないんです。夜になってひどいことに気づいて連れてきました」と。

この町の病院では、交通事故で頭部打撲した小学生も運ばれてきました。脳外科の診察が必要とみて釧路に送る手配中に目の前で亡くしました。おそらくはたとえ救急車に乗せたとしても2時間もかかる釧路に着くまではもたなかったらろうとは思いますが。いちかばちか一般外科の自分でも開頭してやればよかったのかと思ったりもしました。

札幌市の夜間急病センターでの小児患者の大半も、日中からおかしかったものの、親の

都合がつかなかったことが夜間の受診になった理由だと言います。しかしながら街の子はまだ良いのです。いざとなれば夜間でも専門医にかかることができるのですが、この広い北海道のほとんどのこどもは札幌のようにはいかないのが実態です。

こどもは救急患者となっても、おとなの都合によって適切な対応がなければ、必要な医療の恩恵が受けられないことがあるのです。

小児外科学会地方会を9月に行うのを機会に、「小児救急と外科」の市民公開講座を企画しました。本道の小児救急の現状について市民と医療者の討論を期待します。

## アメリカの女性をいじめるのは、弱いものいじめにならぬ

札幌市医師会 門脇 純一

日本の男性は、アメリカに行くと、多かれ少なかれ、アメリカの女性の横暴なのに閉口し、愚痴をこぼす人が多い。

ある日本人男性は、世界の三悪は、アメリカ女性、英国の食事、日本の道路と評したそうである。ここでは、名誉のためにも、つけ加えなければならぬのは、感じ易い日本人男性の選択眼によると、いうことである。

医師と看護師の関係は、戦後、次第にアメリカ化し、職業化してきていることが、指摘されている。常に責任逃れに懸命だという。

アメリカ男性は、女性の機嫌を上手にとり、動かしているようだが、日本人男性医師はこの点、下手くそで、決してうまいとはいえない。ただ独身のナースは、まだいくらか優しくしてくれる傾向があるようだ。このことは、どうやら世界共通らしい。

アメリカの修練中の医師は、大変厳しく、当直時には、寝れないことさえある。こんな時には、アメリカ人との体力差を感じさせられるという。

ナースが宿直医を起こすのは、患者の重症度よりは、彼女らの判断基準によるということが、あるという。宿直も少しなれてくると、上申

があった時に、今度は逆に、ナースに向かって、その症状は何時から始まり、何時、報告があったのと、聞き返す。その妥当性を確認して、密かに普段の心のわだかまりを癒している医師もいる。

彼らに言わせると、アメリカの女性をいじめても、弱いものいじめにはならぬ、という。

## 火山と観光地

函館市医師会  
国立病院機構  
函館病院 荻田 征美

北海道の観光地はほとんどが火山の周辺である。中でも洞爺湖周辺の歴史は古い。古くてもれっきとした活火山で、規模の大小はあるものの、未だに10年に一度は噴火を繰り返している。昭和に入ってからできた昭和新山は火山によって生まれた山の典型である。その様な活動もさすがに、ただ小規模な噴火が繰り返されるだけでは、宿泊客の不安を募るのみで観光としては代わり映えがしない。平成に入ってから客離れが目につくようになり、観光地としての凋落振りが目に見えてうかがわれるようになってきた。

平成12年に起きた火山活動はこれまでのそれと比べて規模が格段に大きかった。火山活動の観察が行き届いていた所為か、火山予知が出されて予め警戒されていた。火山の噴火の秒読みが始まると、さながらスポーツ番組を見るように人々はテレビに見入っていた。新たな火山の火口が予想より民家やホテルの近くに出現して度肝を抜かれ、急遽、住民と観光客に避難勧告が出された。自然現象であるから、ただ、事のなるが儘に対応するしかなかった。追い打ちをかけるように「活火山なのであるから安全を無視して建てたホテルや旅館は火口に近過ぎる」「この様な安全性を無視した観光地は世界でも類がない」などと以前からその危険性を忠告していたかの様な、火山学者の言まで飛び出した。折から観光地としても斜陽であることが取りざたされていた矢先であった。そのことも手伝って、

地元の人たちには観光地での職を奪われたばかりでなく、住む家も失い、今後の生計の見通しもなくなったことに、「泣き面に蜂」と人々の同情を一心に集めた。

数ヵ月後、火山の収束宣言が下され、やがて観光地での活動が始まった。新たな観光道も建設されて再開通されたと、テレビや新聞で報道された。周囲の同情を集めた後であった分、あまり関係のない私たちまでに安堵感が漂った。次の瞬間、物見高い野次馬の好奇心に駆られ、火山の現状偵察に出かけてみる気になった。現場に来て見ると、先ず火山噴火の後を近くで見るという迫力を生で感じた。舗装されたハイウェイもセンターラインまで痛々しく寸断され、その側に立っていたホテルなどの施設も地盤沈下のため半壊していた。そこに雨水が溜まり半壊した家屋を半分水没させ、地盤沈下した辺り一面は沼のようになっている。まるで遠い昔の史跡を見るような錯覚に捕らわれた。また昨日まで平坦な道であったと思われる所に舗装道路にひび割れが入っていたり、パッチワークのように新たに隆起した山にへばりついたりで、その周辺は真新しい火山灰や荒々しい岩石がむき出しになっていた。そして既に火山灰の合間からは植物の新芽が伸びていて、「それでも生きている」という自然の息吹と逞しさが垣間見られた。

自然のなせる業に驚いたのは事実であるが、さらに驚いたことには、そこに群がる近郊の人たちの多さであった。物見高い野次馬は私だけではなく、かくもこんなにいるのかと再認識した。にわか増設された駐車場は満杯寸前であり、新たにできた遊歩道の周りには、従来からの土産物に加えて、噴火当時の写真なども追加したおみやげ店が林立していた。遊歩道を歩いている人たちに混じって、現状を説明して歩く初老のおじさんがいた。聞くとはなしにその説明を聞いていると、「あその地面のめり込んでいるところで壊れかかっている家が俺の家だ」と言っている。自然災害の犠牲者の証言を語っているだけでなく、観光地の語り部をもちやっかりと努めていることに思わず苦笑してしまった。新たな付加価値をつけて前にも増して観光客が増えたとのことである。噴火直後の火山学者の言も何処へやら、我が北海道の観光地は逞しく蘇っている。